

一 八郎太郎と南祖坊

十和田南駅の東方五^キのところに草木の保田^{ほった}という小さな部落がある。この部落の草分けで、部落の人たちが惣右衛門屋敷とよぶ家がある。昭和五十年八月十七日この屋敷内に「伝説八郎太郎誕生の地」の石碑がたつた。

この家の桂井戸は八郎太郎が産湯を使い朝夕に飲んだ水だといわれている。十和田湖、八郎潟、田沢湖の三湖を結び奥羽にまたがる雄大な伝説の主人公八郎太郎の生まれた部落であり、惣右衛門家の久内という人の子が八郎太郎である。

生まれるとすぐ歩きだし、十二、三歳になると背丈は二尺にもなり、大人の倍もの力持ちとなった。しかし心はやさしく親孝行であった。毎日山や谷を駆けまわって鳥や獣をとり、秋になると栗やきのこをとってきては売り、その金で両親の好きなものを買ってあげていた。

若者になってからはマダという木の皮をはぎとってきて縄を作ったり

むしろを作くって売り、獣をとって生活していた。マダの内皮で糸を取り布や着物も作ったからマダは暮らしの中で大切なことであった。

ある日独川村の三治、ふた渡村の喜藤という仲間と一緒に、鹿角の北方津久子森と尾国山と赤倉岳の間へ登り屋夜山働きに余念がなかった。炊事は三人で交代にやっていた。八郎太郎が炊事当番に当たった日の事である。朝めしの仕度に沢へおりて水を汲んでいると三匹の大きな岩魚が自分から桶の中に踊り込んだ。八郎太郎はたき火で岩魚を焼きはじめた。三治と喜藤はなかなか帰ってこない。焼いている魚はいい匂いをあたりいっぱいにただよわせる。とうとうこらえきれなくなった八郎太郎は「一尾だけは俺のぶんだから……」と食べた。ところが、あまりの美味に残りの二尾もすっかりたいらげてしまった。

すると、のどがひりひりとかわいて死にそうに苦しい。谷川へ急いで走りおり、腹ばいになって水を飲んだ。のどのかわきは、なかなかおさまらない。こうして水を飲みつつけること三三屋夜、身は三〇余丈、八頭をもつ蛇身となっていた。

蛇身になった八郎太郎は、十の沢の沢水をせきとめて湖をつくった。これが十和田湖で、八郎太郎はその主になったのである。湖畔に花が咲き、花が散り、まばゆい青葉が紅葉に変わり、やがてうつろい、里人は死に、そして生まれ、数えきれない星霜が過ぎていった。しかし、湖の主・八郎太郎は水底に長々と身を横たえ、静かな日々を送り迎えていた。

話かわって、十和田湖の西方七崎村に戸渡五郎左衛門という人がいた